解説

三谷 惠子

カリム・ザイモヴィッチ作『姿なき怪奇』の舞台は一九九三年か九四年のサラエヴォ、ボスニア戦争の砲弾が降り注ぐさなかである。ザイモヴィッチ自身がそこで暮らしていた一九九二年、サラエヴォの国立図書館が砲撃によって破壊された。建物は一九世紀末のオーストリア支配時代に市庁舎として造築されたもので、作品冒頭に出てくる「ヴィエチニツァ」はボスニア語で「市庁舎」の意味。第二次世界大戦後は図書館になったが、ヴィエチニツァという呼び名はそのまま使われていた。ヴィエチニツァは図書館として何万という書物を守ってきたが、この砲撃で多くの書物とともに焼失、その悲劇からザイモヴィッチの創作が生まれた。訳出したのはこの作品の、冒頭二章である。

破壊されたヴィエチニツァの隅から救い出された一冊の本が「僕」の手に渡る。そこには、第一次世界大戦前夜のサラエヴォで起きた猟奇的事件――件の本によれば吸血鬼の仕業という――の調査に関わったドブロスラヴ・ミフチッチの話が書かれていた。「僕」はこれをフィクションと思いながら、内容を読者に紹介しはじめる。本訳出は作品のこの部分まで。

古い書物の中から出てきた吸血鬼事件、という話の設定は目新しいものではないかもしれないが、二〇世紀の初めと終わりの二つの不穏なサラエヴォを結びつけ、ザイモヴィッチは巧みな文の展開で読み手を惹きつける。「僕」はこの後さらに《吸血鬼ハンター》ミフチッチの本を読みつづけ、やがてこれが実はノン・フィクションかもしれないと思うようになる。そしてミフチッチの記述に事実的裏付けがあることに気づいた「僕」はついに、戦争と流血にまみれた現代のサラエヴォで、吸血鬼がふたたび蘇ったという確かな証拠を見つけるのである。

作者ザイモヴィッチは一九七一年サラエヴォ生まれ。高校を卒業して兵役を終え大学に入学する頃には、サラエヴォはすでに臨戦状態にあった。父親はユーゴ時代にはよく知られた画家で、その影響を受けてか、一四歳ですでに、絵画とくに日本ではコミックとされるジャンルの批評を発表して注目される存在となった。大学では最初美術を専攻しすぐに比較文学に転科、同時に独立系ラジオ局《ジッド（壁）》のスタッフとなり、ラジオドラマの台本を書きはじめた。本作『姿なき怪奇』も、当初は一九九三年か九四年に放送されたもので、それをザイモヴィッチ自身が出版用に書き直した作品である。

本作品が収録されている作品集『ラズベリージャムの秘密』（Tajna džema od malina）には、ほかに、同じく当初ラジオで放送され、その後ザイモヴィッチが自分で出版用に書き直したものが五編、また作品集の表題となった『ラズベリージャムの秘密』を含むラジオドラマの台本四編、そして無題のまま残された一編が収録されている。無題の作品を最後に、カリム・ザイモヴィッチは一九九五年の夏、二四歳の生涯を閉じた。デイトン和平合意によってサラエヴォに平穏が戻るまであと数ヶ月という時、手榴弾の破片にあたっての死だった。作品集は、彼の死後、周囲の人々の発意で出来上がったものだ。

作品集の中の作品はどれも、もともとラジオドラマという制約もあってか、長いものではない。けれどそこには、東西の古典文学やユーゴスラヴィアの文学伝統――ツルニャンスキー、キシュ、パヴィッチなど――を熟知した作家の若々しい創造力と、文学そのものへの愛着がうかがえる。二〇歳をわずかに過ぎたばかりという歳、そして銃弾の恐怖に囲まれた極限状況を考えると、親交のあった作家ミリェンコ・イェルゴヴィッチが惜しんだ通り、まさに《未完の大器》だったといえるだろう。